

# 沖縄の利用の可能性のある貝類 I

## マルスダレガイ科

久保弘文・大嶋洋行

### The Illustrated Guide of Edible Molluscs on Fisheries of Okinawa1 Family Veneridae

Hirofumi Kubo and Hiroyuki Oshima

#### Abstract

Most Imbayment shore on Okinawa-Jima Is. were surveyed Edible Venerid clams (Bivalvia: Family Veneridae). However thire habitats have been reduced by water-front projects, These clams have to be surveyed about importance on fisheries now. This paper has been made on purpose to introduce to fisherman and worker of fisheries cooperation.

#### 目的

沖縄周辺には黒田1960により約2000種以上の貝類が記録されているが、水産上、特に市場で県産貝類として扱われる種類はシャコガイ科4種(ヒメジャコ、シラナミ、ヒレジャコ、シャゴウ)、リュウテンサザエ科2種(チョウセンサザエ、ヤコウガイ)、ニシキウズガイ科2種(タカセガイ、ヒロセガイ)その他マガキガイ、クロチョウガイ、ミドリイガイ、マベ、ウミギク、ウラキツキガイ等、全種類のわずか100分の1程度の20種程度に留まると考えられる。現在も市場の中核はやはり魚類が占めているが、昨今のグルメ嗜好でセリ等にこれまで余り知られていなかった貝類(二枚貝等)が水揚げされている様で、それらは殆ど地元の貝類で有りながら「ハマグリ」、「アサリ」や「シジミ」といった俗名で呼ばれ、市場統計上の混乱を招いている。今後、磯根資源の枯渇やこうした嗜好によって、こうした名も無き二枚貝が着目される可能性がある。しかしながら、本科を含む多くの有用二枚貝類の生息場所である内湾浅海域は埋め立てを始め様ざまな開発計画が打ち立てられており、ほとんど生態知見や利用可否を論議する間もなく、地下に葬りさらされる懸念があり、早急な知見収集が必要である。したがって、まず種類を整理する意味でのマニュアル的な目的に主眼をおいた。

#### 方法

沖縄島周辺の複数箇所で行われる「潮干狩」で消費されている種類を中心に調査し、今回はマルスダレガイ科に絞って、生息環境・産状、利用状況・開発案を記載し、図版を示した。また食用として将来、可能性のある種についても同様の記載をおこなった。なお殻の特徴は一般的な図鑑に記載されているので省略した。

## 結果

沖縄島周辺で利用または利用の可能性のある種類は8種であった。尚、図のスケールはすべて1 cmである。

### 1. アラスジケマンガイ (図1) Gafrarium tumidum Roding

生息場所・産状:内湾の潮間帯上中部の泥の多い干潟。沖縄島全域に多産するが、とりわけ羽地内海、泡瀬海岸(中城湾岸)に多産し、100個/㎡以上の密度を示す海域もある。主婦がおもに採っているのが本種で、市場では本科中、数量ともに最も多い重要種である。

利用状況:身入りは悪いが、汁ものとして非常に美味。

開発案:生息域においても底質、地盤高、還元層の発達状態により分布密度が大きく異なるため、これらを詳細に調査し、要因を解明すれば、客土、耕耘、作濡、地盤高調整などによって漁場拡大の可能性は大である。

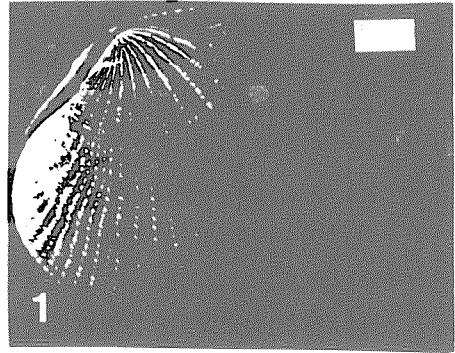


図1 アラスジケマンガイ  
Gafrarium tumidum Roding

### 2. スダレハマグリ (図2) Katylisia japonica (Gmelin)

生息場所・産状:内湾の潮間帯中部の砂泥底から礫混じりの砂地まで広範囲に分布。瀬長島、羽地、中城湾岸、大宜味村塩屋等に普通 潮干狩のメインメニューの一つ。

利用状況:汁ものとして美味。

開発案:砂泥域の保全。

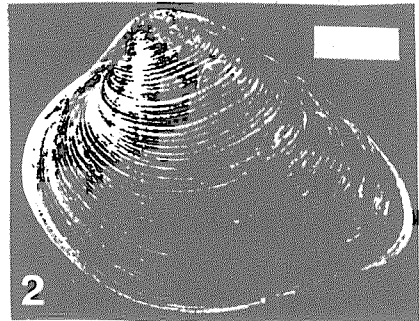


図2 スダレハマグリ  
Katylisia japonica (Gmelin)

### 3. シラオガイ (図3) Circe scripta Linnaeus

生息場所・産状:内湾の泥の多い干潟。アラスジケマンガイ等と共に潮干狩で混獲される程度。

利用状況:潮干狩の獲物として食用とされるが身があまりない。

開発案:砂泥域の保全

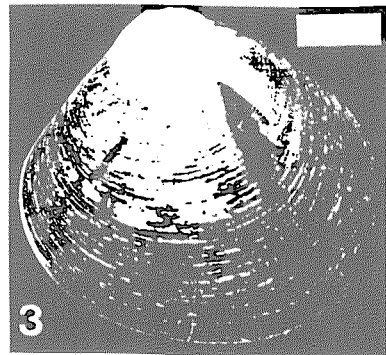


図3 シラオガイ Circe scripta Linnaeus

4. オキシジミガイ (図4) Cyclina sinensis (Gmelin)

生息場所・産状:内湾の潮間帯上部の上記2種より泥深い所。汚染に強い種類の様で瀬長島や糸満市真栄里等の汚れた所にも多産、他に本部町満名川河口では普通に食用として利用する。

利用状況:砂吐きが悪いが汁ものとして良い。

開発案:砂泥域の保全

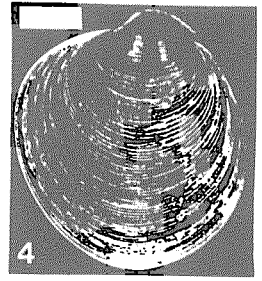


図4 オキシジミガイ  
Cyclina sinensis (Gmelin)

5. ヌノメガイ (図5) Periglypta puerpera Linnaeus

生息環境・産状:リーフ内の岩などの隙間に溜まった砂地。普通だが沢山を採るのは困難。

利用状況:殆ど食用にはされていないが美味。

開発案:リーフ付近に設置した砂の詰まったブロックの隙間に自然発生するので、漁場造成の可能性はある。

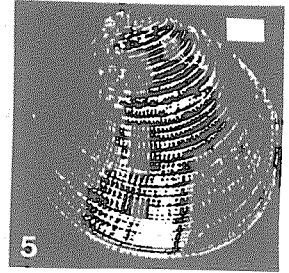


図5 ヌノメガイ  
Periglypta puerpera linnaeus

6. リュウキュウアサリ (図6)  
Tapes literata (Linnaeus)

生息場所・産状:内湾の潮間帯中部の藻場と隣接した礫混じりの砂泥地。以前、瀬長島、糸満市間栄里、大宜味村塩屋、羽地内海等に普通に産したが、現在は著しく減少。

利用状況:大型(10cm程度)で殻が薄く、豪華で身の量が多い上、味がよく、砂吐きが良いなど、本県産マルスダレガイ科の最高峰。酒蒸し、汁もの他、塩焼きなどで非常に美味。

開発案:藻場を含む砂浜域全体にわたる保全

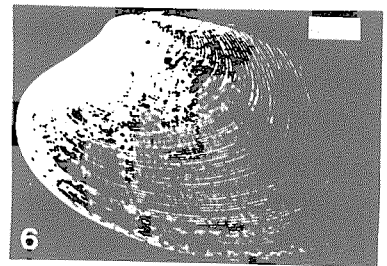


図6 リュウキュウアサリ  
Tapes literata (Linnaeus)

7. タイワンハマグリ (図7) Meretrix meretrix (Linnaeus)

生息場所・産状:内湾の潮間帯下部の砂泥地と考えられるが正確には不明。1991年末、中城湾南原沖浚渫により、複数の新鮮な死殻が確認された。現在は減少している可能性があるが、いわゆるハマグリ属の一種で多産地が発見されれば、重要な資源と考えられる。

利用状況:本土では酒蒸し、汁もの他、塩焼きなどで利用される。

開発案:内湾奥部の潮間帯下部砂泥域の保全

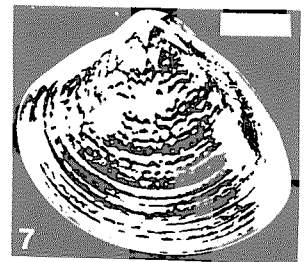


図7 タイワンハマグリ  
Meretrix meretrix (Linnaeus)

## 8. ヒメアサリ *Ruditapes variegata* (Sowerby)

生息場所・産状:内湾の潮間帯上中部の礫混じりの砂地。以前、瀬長島、中城湾岸、大宜味村塩屋、知念村海野海岸に多産したが、現在は少ないが、北谷海岸では多産する。

利用状況:味がよく、酒蒸し、汁ものとして非常に美味。

開発案:砂泥域の保全、特に珊瑚礫混じり砂地の正常化。

### 考察

以上の8種以外にも利用可能な種類は多いが少なくとも現在は個体数が少なく（以前は恐らく多産）特に取り上げなかった。それらはユウカゲハマグリ、スリガハマ、ヒメリュウキュウアサリ、オオヌノメガイである。リュウキュウアサリは水産上優良種にも関わらず、資源が減少しており、1986年までは那覇市公設市場や糸満でも売っていたが、現在は全く見られない。これは上述の種類や他のグループのリュウキュウサルボウ、リュウキュウザルガイ、ウラキツキガイやリュウキュウアリソガイ等もあわせて、藻場を取り巻く環境に生息していた種群である。黒住・金城,1988は豊見城村の貝塚より多量のウラキツキガイを記録しているが、現在、沖縄島での本種の産出はきわめて稀である。過去の知見が乏しく、立証することは今更不可能であるが、藻場環境の変化が砂浜性二枚貝の減少に何等かの影響があったことは否定できない。今後、藻場を含め砂浜域の環境保全が資源利用を促す点からも最も重要なテーマと考えられる。またアラスジケマンガイやスタレハマグリ等は潮干狩の対象種で、資源保護上、主婦の方等を対象に小さい貝は採らないようなパンフレットをつくるなども有効な啓蒙方法と考えられ、特にスタレハマグリは幼貝でもある程度の大きさがあるので潮干狩で幼貝期に採られてしまう可能性が高く、近年激減しており、それらの根拠となる生態知見の収集が必要と考えられる。

### 参考文献

- 吉良哲明, 1959 原色日本貝類図鑑 240pp. 保育社(大阪).
- 黒住耐二・金城亀信, 1988 豊見城村の長嶺、保栄茂および平良グスク試掘調査により出土した貝類。「豊見城村の遺跡」豊見城村文化財調査報告書 第3集.137-153pp 豊見城村教育委員会.
- 黒田徳米, 1960 沖縄群島産貝類目録. IV+160pp, 3pls., 琉球大学研究普及課.
- 波部忠重, 1961 続原色日本貝類図鑑 182pp. 保育社(大阪).
- 波部忠重, 1977 日本産軟体動物分類学 二枚貝綱/掘足綱 北隆館(東京)